

東京喰種：re Le mat

瀬本さん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『竜戦』から一年後の東京

かつてあった喰種対策局（CCG）が解体され、東京保安委員会（TSC）が発足した。

その東京保安委員会（TSC）で最高位「竜将」を持つ最強保安官の名は、鈴屋什造”。

彼はかつて活動拠点であった13区の夜の街を歩いていると、一人の女子高生と出会う。

その女子高生の名は”田中摩美々”。

のちに大舞台に立つ283プロダクションのアイドルとなる女子高生であった。

投稿：不定期　投稿一週間前にツイッター及び活動報告でお知らせをします。

# 目次

H e s J o k e r	1	M y h i d d e n h e a r t
16		

My hidden heart

あれから東京の街は変わった

かつては高層ビルが立ち並び、多くの人が歩き、夜も輝き続ける大都会

そのまま一度も崩れることなく大きくなると思われた

しかし、突如東京の街に現れた“竜”によって街が破壊され、混乱を生じさせた

建物が壊され、多くの死傷者を出したこの動乱は戦時中の東京以来の被害を生み出した

### 動乱から翌年

竜によつて破壊された東京は徐々に復興が進んでいった

それは人間の手だけではなく、敵であつた喰種も協力しあつて復興を進めていた

東京は今、喰種と人間が共生する場所となりつつあった

東京都13区

夜の暗闇に反するように輝く街。昼も夜も賑わうこの街は若者がよく歩き、空が暗さを反抗するように輝く街の光。夜はまだまだ始まったばかりだった。

(今日ははんべーもないからつままないですね)

夜の街中に黒髪のショートカットに赤いヘアピンをし、少女と間違えてしまうほどの中性的な男性が夜の13区に歩いていて。どこか不満そうに丸いキャンディーを口に入れながら、小柄な体に合わない銀色の大きなアタッシュケースを肩手でふらつくよう

に歩いていった。

彼の名は鈴屋<sup>すずや</sup>什造<sup>じゆうぞう</sup>。

彼はただの若者ではなく、東京保安委員<sup>T</sup>会の保安官<sup>S</sup>だ。

以前は喰種<sup>C</sup>対策局<sup>G</sup>の特等捜査官<sup>S</sup>なのだったが、竜の動乱後喰種<sup>C</sup>対策局<sup>G</sup>は解体され東京保安委員<sup>T</sup>会<sup>C</sup>が発足したことにより最高位である『竜将』となった。什造が特等保安官<sup>T</sup>ではなく『竜将』になったのは実績と実力が他の保安官に比べ物にならないほど功績を挙げていた。まだ年が26にも関わらずここまで功績を上げるのは天才に等しい存在<sup>T</sup>だ。

(全くはんべーはなにしたんですかねー??)

いつもなら什造の部下である阿原<sup>あばら</sup>半兵衛<sup>はんべえ</sup>がいるのだが、途中13区支部からなぜか呼び出しがあったため什造の元から離れてしまった。什造はせっかく自分を構ってくれる半兵衛<sup>はんべえ</sup>がいなかったため、舐めていた飴を無くした口を少し膨らませながら街夜<sup>まちよ</sup>の歩いていた。退屈<sup>たいくつ</sup>そうに街の中を歩いていると……

(ん?)

退屈<sup>たいくつ</sup>そうに歩いていた鈴屋の横に制服を着た高校生がふらりと通った。



「……」

その少女は補導されることに恐れを知らずにどこかおぼつかない顔でゆらゆらと夜の街を歩いていった。

（……こんな時間に、夜遊びですか）

13区はかつては喰種が多く存在し、喰種による事件があとが絶えない危険な場所であつたが、鈴屋什造率いる鈴屋班によつて完塞が達成された。しかしそれは竜による動乱が起こる前のことである。竜の動乱よりは街が破壊されその後はの復旧が進んでいるのだが、災害の混乱によつて喰種だけではなく人間によつて起こされた犯罪が少々目立つようになつた。それで13区内に所属する保安官の活動は喰種対策や喰種に対して捜査をするのだが、ここ最近では警察と同様街のパトロールや未成年者に注意を促すことなどの警察に任じていた仕事も一つになり以前より仕事は増えている。什造はやれやれとため息をした後、什造の横を通り過ぎた少女に近づいた。

「そのあなた、あぶないですよー？」

什造はその少女に男性とは連想しにくい声で呼びかけると少女はピタリと足を止めた。

「……何か用ですかあ？」

その少女はのろのろと振り向き、ゆっくりとした口調で嫌そうな目つきで什造を見

る。紫色をしたふわふわとしたツイントールをした髪に、制服にパンクのファッションをした少女で美しいを顔をしていた。普通の人が彼女を見たら不真面目な女子高校生だと認識するだろう。

「こんな時間に歩くのはダメですよー」

「……？」

什造が少女に注意するとその少女は鈴屋の言葉に目を細めた。まるでこの人は何を言っているの？と。

「……なんでそんなこと言うんですかあ？」

「ん？」

「そう言っているあなたも、そうじゃないですかあ？」

その少女はどこか軽蔑するような笑いをいた。什造はその少女とほぼ同じ身長で、見た目から保安官とはわかりにくい容姿であったからだ。

「違うですよー、僕は立派な大人ですから大丈夫です」

「大人？そうは見えないですケドー？だったら、証明してくださいよー？」

「仕方ないですねー」

什造はめんどくさそうに言う 것처럼持っていたアタッシユケースを下ろしポケットに入れた。什造は保安官のため保安官手帳を所持している。それを少女に見せれば什

造はただの人ではなく保安官だと証明される。

——しかし

「ありや?」

すると捜査官手帳を探していた什造はあることに気がついた。何度もポケットに入れても保安官手帳らしきものが見つかからないのだ。何度もポケットを漁るが、それらしきものが見つかからない。什造のポケットにあったのは携帯電話とくしゃくしゃになつた一枚の10000円紙幣。

(あーそうでした…。うっかり半兵衛に渡してましたね…。)

什造はいつもお世話役でもある半兵衛に必要な所持品を渡しているため今は持つていない。半兵衛は今13区支部にいるため呼び出すのに時間がかかる。什造は下ろしていたアタッシュケースを持ち上げ、どうすれば自分が保安官だと証明できるか考え

た。流石に什造が持っているアタツシユケースの中身を見せても理解葉されないだろうし、モラル上めんどくさいことになる

「おやおやあ？見つからないのですかあ？」

するとポケットを入れたままの什造を見た少女は目を細めどこか煽るように彼に声をかけた。その少女の顔を見た什造は「∴∴ なんですか？」と聞くと∴∴

「だったら、何か」甘いもの”でも食べに行かないですかあ？」

”甘いもの”？」

什造は少女の発言に疑問を抱き、一体なんだろうと更に聞こうとしたその時だった。

「ふふふん、それは着いてからのお楽しみですよー」

突然少女は什造の手を取り、什造にどこに行くのか告げられずに夜の街の奥に向かった。

什造が少女に連れてかれたのは街の中にあつたファミリーレストランだった。そこは24時間営業しているため夜でもお店は開いている。

「へえー、あなたは男なんですネー。高校生と見えなくもありませんケドー？」  
「よく言われますので、ぜんぜん気にしなさいです」

什造と少女はテーブル席でお互いが向き合う形で座っていた。店内は夜遅くということか他の客の姿が1、2人しかいないほどガラガラに空いていた。

「そういえばー、何で私のお誘いに乗ったのですかあ？」  
「僕もちょうど甘いものが欲しかったので」

本来ならば什造が足を止めてそのまま補導するべきなのだが、補導すべき立場である什造は自分を連れていかせた少女を補導することなく一緒にファミリーレストランに入っていた。普通ならば保安官と女学生が一緒に行く真似をしたら大問題になるが、什造の姿が中性的のおかげか周囲から怪しまれずに入店ができた。

「それにしても、夜の街を歩いて危ないじゃないですか？」

「危ない？別にいつもこうですケドー……てか、あなたの方がめっちゃめっちゃ怪しいです

よー？」

「だから僕は東京保安委員会Tの保安官Sです」

「本当にその保安官ですかあ？」

什造は東京保安委員会内では多くの保安官に尊敬される人物なのだが、今は保安官として証明できるものではなく少女の視点から見ると、什造は女の子みたいな男性だ。什造が何度も少女に自分は保安官だと話していると、少女が「あ、きた」と言うと店員さんが出た。一つのパフェが什造たちが座る席に向かっていた。そのパフェは什造が頼んだものだった。パフェを届けた店員さんは二人が座るテーブルのちょうど真ん中にパフェを置き、二人の元から去っていった。その瞬間、少女はスプーンを取り出しパフェを取ろうとすると、什造はそのパフェを素早く自分に元に下げた。

「あれれ？どうしちゃったんですかあ？」

「僕のパフェを取らないでください」

什造は嫌そうな顔で少女を見た。

「えー、なんでくれないのですかあ？」

「これは僕が頼んだものなので、それにあなたはなぜパフェを頼まないのですか？」

什造がそう聞くと少女はふつと笑う。

「私、今お金持ってないんですよねえ」

少女はそう言うのとポケットから電車の定期券をテーブルに出し、これ以上持っているものがないと表現するように両手をパツと見せた。

「持つてないんですか？悪い子じゃないですかー」

「そうですよお、私、悪い子ですから」

少女はそう言うのとふふつと笑った。

「それにしても、お兄さんは結構イジワルな人ですねえ」

「お兄さんじゃないくて、ジューゾでいいですよー」

「じゅーぞですかあ？面白い名前ですねえ」

摩美々はふふつとからかっているような笑いをした。

「あなたの名前はなんですか？」

「私ですか？田中摩美々たなかまみみっていいいますー」

「マミミですか？」

「うん、だから、私に一口ぐらいくださいよー」

そういうと摩美々はスプーンを持ち、パフェをすくう準備をしていた。おそらく彼女は中々諦める気はないだろう。什造はそんな姿をした摩美々にため息を一つした後……

「まったく悪い子ですねえ」

什造はどこか諦めたかのようにパフェを少し前に出した。そうすると摩美々はふふつと満足そうに持っていたスプーンでパフェをひとすくいをし、口に頬張り「私、悪い子ですからあ」と什造にどこかバカにするように笑った。

「なんでマミミは一人で歩いてたんですか？」

「ただの放浪ですよー？」

「危ないですよ？今13区は喰種だけでじゃなく、人間が起こした犯罪が増えているので早く帰ってください。特に喰種は危ないので”変な所”に行かないでくださいね？」

什造は摩美々に強い口調で注意をした。什造たちがいる13区は以前のような血の気の多い区ほどではないものの、危険な場所に戻りつつある。什造は長く喰種と戦ってきた為喰種に対しての危なさを知っている。

「……そうですかあ」

什造の言葉を耳にした摩美々はふざけた様子をせず、落ち着いた様子で聞いていた。先ほどまでは什造に対して舐めた態度をしていたのだが、先ほどとは一変して大人しく聞いていた。

「まあ、そんなに言うなら、じゅーぞに免じて、今日は帰ってあげますねー。さよーならあ」

摩美々はそう言うと言席から立ち上がり、お店から出ていった。お店の窓から見える摩美々は駅の方へと向かっていった。

「……”変な子”もいるんですねー」

什造はそう考えるとパフェを口に頬張り始めた。パフェは摩美々に少し食べられた



のだが、什造は残念な気持ちを抱かず『まあ、いいか』とパフェをスプーンで口に入れた。普段の什造なら怒るべきところなのだが、摩美々に対しては自然と怒るといふ選択肢が浮かばなかった。什造は理由を考えず一人パフェを食べ続ける。

——その時だった。

(——っ！)

するとパフェを食べていた什造はピタリと手を止めた。ちようど一人の男性客が什造が座る席を通り過ぎた時に何か“匂い”に気がついた。

(∴今、“鉄の匂い”がしましたね∴)

什造にとっては仕事で慣れた匂い。その匂いをしたら間違はなく“ヤツら”がいる証拠でもあり、どこかで人間を殺した証拠だ。その匂いをした主は摩美々が席を立ち上

がった時に同じく立ち上がり、摩美々についていくようにお店から出ていった。

(… まさかですかねえ?)

仕造は急いでパフェを口に入れ、アタツシケースをガタガタと音を立てながら取り出し、ぼろぼろの千円札を机に置きすぐにお店から出ていった。おそらく仕造の横を通り過ぎた男は摩美々をターゲットしていたと思われる。

(… まったく、マミミは駅に向かつてないじゃないですか)

男の跡を辿ると駅に向かつておらず、薄暗い路地に向かつていた。おそらく摩美々はそこに向かったと思われる。

仕造は胸の奥にイライラとした感情を生み出し、男が向かった方向に急いで向かった。

一歩遅れてしまえば、  
彼女が殺されてしまう

## H e ' s J o k e r

人だかりの少ない夜の街に歩く、私。私がこの街に訪れた時は明かりがあつたのだが、今ではサビがちよこちよことあるシャッターで閉まつていた。

私の名前は田中摩美々<sup>たなかまみみ</sup>。夜の13区に歩いていた高校生だ。ふつうの高校生が歩いていけない時間帯にも関わらず平然と歩いて、私。そしたら当然誰かが声をかけてきた。その人はナンパをしてきたチャライ男ではなく、よく補導してくる警察の人ではなかつた。その人は東京保安委員会<sup>T S C</sup>の保安官で、名前はじゅーぞと言う。

(じゅーぞとってなんであんなに女の子ぽかつたんだらう?)

じゅーぞと出会つた時を国語で読んだ小説の言葉で表すなら、私は不思議でたまらないと使いたくなる。初めじゅーぞを見た時は同じ女の子だと思つた。保安官とか警察の人つて公務員だからめんどくさい人が思い浮かぶけど、じゅーぞは他の人違つて独特な服で、男の人にも関わらず女の子の子ぽい高い声で私に声をかけたのだ。じゅーぞとファミレスに行く前まではじゅーぞが本当に東京保安委員会<sup>T S C</sup>の人だと全く信じなかつた。

(まあ、話してて面白い人だなあつと思つたな)

じゅーぞと別れた私は駅へと続く道に歩いていった。什造からそのまま家に帰るよう言われたんだけど…

しかし私は、じゅーぞの言葉をそのまま受け入れるつもりはなかった。

(私は悪い子ですからねー)

私ははじゅーぞに軽蔑するかのように嘲笑い、歩いていた歩道から抜けて人気がない建物の裏に歩いていった。そこは街の光が行き届かない暗い小道で、生ゴミの嫌な匂いが立ち込めれおり、換気扇の音が怪しさを顕れていた。じゅーぞはここに私が行っていることは思っていないだろう、と考えていた私。

その瞬間だった。

「っ！」

突如、後ろから誰かの手が私の口を塞ぎ、そのまま暗闇へと引き摺り込まれた。闇に引き込まれたと同時に私は視界を失い、意識も同じく消え去ってしまった。

「……？」

意識が徐々に取り戻した、私。

目をゆつくりと開けると先ほどいたはずの狭い小道ではなく、薄暗い高架橋の下に倒れていた。周りを見渡そうとしたその時

「お、やっと目覚めたか」

すると私の後ろから誰かの声が聞こえた。私は後ろに振り向くと何人かの男が私を見下ろすように冷たい視線で見ている。

「……っ!!」

「おや?俺たちに驚いたあまり話す気はないようだな?」

一人の男が地面に倒れる私に近づき、私の顎をぐいっと上げた。私は周りの男たちの顔を見て言葉を出すことができなかつた。彼らの目をよく見るとその男たちの両目は赤黒く染まつていた。この男は人間ではなく、前まで散々テレビで取り上げられていた喰種だとわかつたのだ。まさか自分の目で出会うとは考えもしなかつた。

「さっきいた店でお前をマークして正解だつたな。今まで喰つてきた馬鹿と同じ道に進んでよかつたなあ」

男はそういうと、周りの男たちは冷たくあざ笑う。私は喉に何かかが詰まっているかのようにしやべれない。私の目の前にいる男は赤黒い目で私をまつすぐと見る。

「さてと……ただ喰うだけじゃ物足りねえな?なにせお前はいい女だ。体も顔も他の女のよりいいもんだ。普通に殺しちやもつたいない」

男はそういうと私の顎を掴んでいた手を、そのまま私の腕を掴んだ。

「……いやっ!」

私は自分の手を掴んだ男の手を振り払う。

「おっと、やっと声が聞けた。そう怖がんなよ。ただ痛めつけて死ぬより快樂を得て死んだほうがいいだろ?俺はこういうの最高に好きなんだよ」

男の下劣な顔を見た時、怯える私は胸の中でこう思ったんだ。

私はここで死ぬんだ

周りにいる男たちは私を殺す以外に何をやるかは、目の前の男の瞳で結果がわかる

なんで私は言う通りにしなかったんだろう



あの時じゅーぞの言葉をそのまま従えばよかったのに

後悔と死への恐怖を抱いていた、私

ーーその時だった

「まったく、マミミは本当に悪い子ですねえ」

「っ!!」

緊迫した空気の中、女の子とに似た高い声が空気を一掃するように声が響き、私の周りにいた男たちは声が出た方向に振り返った。私はその声を耳にした時、ピンつと気がついた。まさかと思ひ声が出た方向を向くと、先ほどファミレスで別れていたはずのじゅーぞが右手に銀色のアタツシユケースを持ちながら立っていた。

「なんだてめえ？俺たちに殺されてえか？」

何人かの男は突然現れたじゅーぞに睨みつけるが…

「全く目つきの悪い喰種ですねー。僕をそんなに見つめても何変わらないですよ？あとその子を離してください、嫌がつてますよ？」

じゅーぞは睨みつける喰種たちを怖がることなく笑い、私に指をさした。

「悪いなあ、この女は俺らのもんでね」

私の目の前にいた喰種がじゅーぞにそう言うのと、私の肩に腕を回した。

「まるで夜の繁華街にうろつくチャラ男ですか。そんな強引にやつてもすぐに逃げられますよ？彼女の肩から離れないなら、僕が離れさせますよ」

「なんだと…？」

「だから、僕がこの手で離させましょう」

じゅーぞは恐怖を抱く様子もなくそのまま私の元に近づき、私を触れようとしたその時。

「おい！てめえ!!」

私を掴んでいた喰種は私の肩に置いていた手でじゅーぞの胸元に掴んだ。

「ありやりや。とつても沸点が低い喰種ですな〜」

「さつきから調子こいた態度で喧嘩売ってんのか?!おい!」

じゅーぞは怖がる様子もなく、「はははっ」とただ笑っていた。

「それにしても僕を知らないのですか?もしかしてあなたはまだ東京（こご）に来たばかりの喰種ですね」

「てめえを知ったことか。お前みてえな白鳩（ハト）はすぐに死ぬ雑魚だろ?」

「おお、いい度胸ですな〜。最近ここで喰種の捕食事件が連続して続いていたのは、あなたたちのようですね。確か女性をターゲットにした喰種集団というの正解でしょうか?」

「それがどうしたんだよ?あの動乱後の東京（こご）はヒトを喰うにはうつつけだろ?」

「せつかく人間と喰種が一緒に生きようしようとしているのに、あなたたちが問題を起こしたらダメじゃないですか?まったく迷惑なヤツは嫌ですな〜。ああ、そうか、あな

「私たちはそんな能力はない低能ですね、あつてますか？」

「うつせえな… ヒトだったら、なんでも喰えりやいいだろ!!くそガキが!!」

怒号が耳に痛いほど響き渡る。まずい、私よりも先にじゅーぞが死んでしまう。でも怖いあまり動けない。それに私は喰種と戦う能力はない。

「まず先におめえからぶつころしてやるよ!!」

ああ、まずい。じゅーぞが殺されてしまう。殺されるのにじゅーぞー自身は怖がる様子もなく煽るように笑っていた。何しているの？

「… まったく、おバカな喰種ですね」

じゅーぞがそう言った瞬間、動かなかった私の目を見ると、私に向かってこう言った。

『マミニ、逃げてください』

じゅーぞがそう言った瞬間だった。

「がああああ!!」

するとじゅーぞを掴んでいた男が急に叫び出した。先ほどじゅーぞの胸元をがっしりとしていた腕が、じゅーぞーの左手にいつの間にか現れた小さなナイフであつという間に切断された。胸元を掴まれたじゅーぞはすたつと地面に着地し、左手にあつたナイフをくるくると回した。

「これではあなたは女の子の肩に腕を回せないですね」

「痛ええなああクソが!!!」

じゅーぞを掴んでいた喰種は切断された腕を片手で抑え、声をあげる。

「…今だっ!!!」

周囲の喰種がじゅーぞに注意を向いた瞬間、私はすぐさま立ち上がり物置の奥に逃げた。

「おい待て!!クソアマ…っ!!!」

何人かの喰種は私が逃げたことに気がつき、追いかけてようとした時、突如声が止まり、ぱたりと倒れる音がした。

「僕を置いて背を見せるとは経験が浅い喰種ですね」

私の後ろで一体何が起きたのかわからないが、多分じゅーぞが何かをしてくれた。私は焦る思いを抱えながら、急いで物置の奥に逃げていった。

「…さてと、マミミが離れたのでお仕事を始めますか」

薄暗い高架橋の下にいた、僕。僕は早速喰種と戦うことになりました。

(喰種は：：今は6体ですね)

先ほどマミミを追いかけようとした喰種2体を倒し、あとはリーダーと思われる喰種の腕を切り落とし、今に至っています。

僕がどうしてこの状態になったのかはマミミの行動を見ればわかります。彼女を追った男はただの社会のお荷物の人間ではなくやっぱり喰種でした。彼をマークしたのはマミミが席に立ち上がりお店に出た時、その男はちょうど同じく席に立ち上がり、僕の横を通った時に血の匂いがふと鼻に感じました。それで僕は男の跡について行ったら、高架橋下という喰種の溜まり場にびったりな場所にたどり着きました。

「て、てめえ：：！よくも俺たちの仲間をお!!」

そのマミミを追いかけた男は僕を掴んでいた腕を失い、強い口調で言っているとわりにあっけない姿になっていました。状況を見る限りこの喰種はリーダーだと思われるますが、案外弱いかもしれせん。

(それよりも先ほどマミミに嫌なものを見せましたが：：：状況的に仕方ないですね)

さつきマミミに腕を切断するところを見せてしまいました。喰種に殺されるよりはマシです。マミミには申し訳ありませんが、僕は今戦いに集中しないといけません。

「おいつ！お前ら！さつきさこのガキをぶつ殺せ！」

リーダーの喰種がそう言うのと僕の周囲にいた下っ端の喰種たちはそれぞれ違う形の赫子を体から表し、一斉に僕に襲いかかった。襲いかかってきた喰種は5体。新米の保安官だったら状況が読めずに攻撃されるかもしれません。だけど、僕は違います。

「二氣に来るとは、面白い喰種ですねぇ」

僕は包囲される前にすぐに前から脱出し、手前にいた喰種の手足を僕が持っていたナイフ型クインケ”サソリ”で順番に切り落とし、最後に頭首に突き刺しました。通常喰種は人間と違い体が丈夫なため、ただのナイフや鉄砲の攻撃を受けても無傷です。しかし僕が持っているものはクインケと呼ばれる保安官が持つ対喰種武器で、喰種の体に傷を与えることができ、殺すことができます。

「ああがああ……！」

「はい、一匹目」

僕がそう言うのと首を突き刺していたナイフを抜きとり、手足を切断され首に大きな深傷を負った喰種はぼたりと倒れ、体に生えていた赫子が消え去りました。

「調子のんじゃないね、ガキ!!」

1人が尻尾のような赫子で僕を突き刺そうとしましたが、僕は体を瞬時に避け、左手にもう一本サソリを取り出しナイフを頭に命中させました。

「僕をガキと言つても、おそらく僕はあなた達より大人ですよ。これはある意味補導で





僕はすぐに攻撃を避けるが、反撃のタイミングが見つからずにただ避けていました。羽赫のめんどくさいところは攻撃範囲が広いところ。他の赫子だとタイミングは掴めれますが、羽赫だとわずかながら掴みづらい。あとこのリーダーは先ほどの態度とは違い、この強さはおそらくレートS以上。この集団の中では一番強いはず。」「これでどうだ!!」

するとリーダーの喰種は逃げていく僕に一度弾幕を放つのをやめ、そして逃げ回る僕を追いこすように集中的に弾幕を放ちました。一応その弾幕は頑張れば避けられますが……

「……仕方ないですね」

僕はそう言うと弾幕の弾着地点にわざと入り、持っていたアタツシケースで弾幕を防いだ。アタツシケースに赤い宝石の形をした弾幕が被弾、ケースの取手に弾幕が着弾した振動が伝わりました。

「なんだよ？俺の攻撃に耐えきれないのか？」

「いえいえ、確かにあなたの攻撃は強いのですが、今この箱の中に強いクインケがあるんですよ」

「……は？」

「だいたいナイフ型のクインケ」サソリ」だけで済ますことが多い普段の捜査では使

うことのないクインケ。よっぽど相手が強くない限り使用しないのだが、どうやら今回はその使用する場合のようです。

『おいで、ジェイソン』

僕は誰かに囁くように呟きアタツシケースの取手にあつたボタンを押すと固く閉ざしていたケースがパカッと開き、取手を持っていた手には長い棒が現れ、棒の先には大きな赤い鎌の刃がぎりりと姿を表しました。

「これでよし」

そのクインケの名前は13、s ジェイソン。僕が高レートの喰種を倒し作ったクインケで、“あの時”以来久しぶりに手にできて気持ちがあがります。

「あ、あれは：：！」

すると一部の喰種が什造が持っているクインケに何か気がつき、好戦的な顔が一気に真っ青になった。

「な、なんだよ、お前ら!!」

リーダーの喰種は怯え始めた仲間に異変を感じ、怒りが混じった声で士気を整えさせようする。周りの下っ端喰種は気がついていて、どうやらリーダーは僕の正体に気づいていない。

「ほ、ほ、ポスト!!この白鳩<sup>ハト</sup>は死神ですよ!あの有馬の：：!!!」

「死神……?……っ!」

リーダの喰種は少し考え、そしてやっどハツと目が開いて気がついた。

「……やっど気がつきましたか」

「おめえが……あの死神の鈴屋か?」

「ええ、理解するのに遅かったですね。でも残念ながらさっさと死んでもらいます。あなた方は彼女に良からぬことし、殺そうとしたのですから」

僕は死刑判決を告ぐ裁判官のように静かにそう言うと言うとジエイソンをぎゅつと握り、リーダの喰種に急接近をし、ジエイソンを大きく振りかざした。

この喰種は大きな大罪を犯しました

大人になっていないマミミに危害を加えたのだから

そんな喰種は殺されても問題ないですよね？

つい先ほどまでただ暗かった高架橋は、數十分後には赤い血肉が散乱する殺人現場と同様に光景へと変わっていった。

「二仕事を終えましたね…。」

周囲にいた喰種を一掃した僕は頭を少しかき、一息つきました。いつもなら一体か二体程度の喰種と戦いますが、今回は久しぶりに大人数の敵と戦いました。

(久しぶりにちよつと本気を出してしまいましたね…。)

僕がここまで本気で戦ったのはあの竜の動乱以来です。もちろんあの人の戦いも同じく含みます。

(… マミミのことを忘れていけませんね)

本気で戦ったあまり守るべき人を忘れてしまった、僕。僕はマミミが逃げた方向に振

り向きました。

「マミミミ？出てきてくださいー？」

僕はおそらくマミミが隠れているだろう物置の方向に名前を呼びましたが、返事がまったく返ってきませんでした。

（…怖がっているんでしょか？）

先ほど腕を切ってしまった光景をみてしまったのか、この喰種どもに何か怖いことをされたのかマミミは真つ暗な物置から顔を出してくれません。返事も全く聞こえなかったため僕は仕方なく自分から探しに行くことにしました。

（どこにいるんですかねえ？）

パタパタと履いていたスリッパを鳴らしながら一歩一歩進むたびに段々と暗くなつていく視界。マミミは僕が戦っている時一人で隠れていたと思います。まだ18の女の子が危険な目に出会うとなると心に深い傷を負うのは間違いありません。

「……」

しばらく歩いていた僕はピタリと足を止めた。

「見つけましたよ、マミミ」

「……………」

物置の間に人影を見つけました。そこには両耳を手で塞ぎ、しゃがんでいた紫色をし

た女の子。その子はマミミでした。

「……？」

マミミは僕の声を耳にするとゆっくりと目を開いた。

「……じゅーぞう？」

「ええ、そうですよ？」

僕はそう言うのにこりと笑いました。場を和らげようとしたのですが、今考えてみれば少々怖い行為をしてみましたね、僕。

「……うん」

薄暗いながらマミミは小さく頷きました。見た感じ体には傷はなく、態度は落ち着いていました。

「マミミはここにいてください。僕は応援を呼びますのでー」

僕はそう言い立ち去ろうとしたその時だった。

「……待って」

マミミは突然僕のシャツを掴み、応援を呼ぼうと立ち去ろうとした僕を止めました。

「あの、マミミ。これじゃ応援が呼べないんですが……」

「お願い、ジューゾ。そばにいて」

小さな声でまっすぐと僕の目を見る、マミミ。顔では怖がっている様子はなかったも

の、マミミの瞳は恐怖で怖がっているように見えました。僕は「仕方ないですねえ」とため息をつき持っていたジェイソンを床に置き、マミミの横に座りました。物置の間とすることもあり少し窮屈でしたがマミミは不満の声は上げず黙っていました。

「… 何もしゃべりませんか」

マミミの隣に座ったものの沈黙がただ続いていました。僕は早く現場処理をしなければなりませんですが、マミミはそうはさせてくれません。早く他の保安官に報告したくても携帯などの連絡手段がありません。まさにお手上げな状態です。

（それにしても… マミミは僕と同じ身長なんですね…）

暇であまりに僕は横で静かにしているマミミを見ると、マミミは僕と同じ身長だと気づきました。初めマミミと会った時は自分と同じ身長であるを意識しなかったものの、体がかなり密接しているせいか今更ながら気がつきました。それにマミミの髪はまるで紫の綿あめが2つついているように見えて、マミミはふつーの子ではないことも同じく気がつきました。

「… どうしたんですか？」

僕がマミミをあまりにもジロジロと見ていたせいかわ、ついにマミミは口を開いた。

「いや… マミミは不思議な子ですねえっと思っただけです」

「… そお？じゅーぞの方が不思議だと思っただけ？」

「ええ、そうですね。少し特殊ですけど」

先ほどまで硬かった空気が徐々に和やかになってきました。昔から僕は変な人と言われてきたせいかな冗談が言えます。

「ねえ、じゅーぞ」

「ん？」

「その首にある糸ってどうなってるの？」

マミミは僕の首についてあった赤い糸に気になった様子で指を指しました。

「ああ、これはボディステッチと言って体に縫うヤツです」

「ボディステッチ？」

「体に糸を通して縫うヤツで、もちろん痛いですけどピアスをつける感覚だったら問題ないですよ」

「へー、今度私もやろうかな？」

「ダメですよ。マミミの肌はとても綺麗ですので、傷がついたら大変です」

「えー、私ピアスしてるのにそのボディーなんちゃらはダメなの？」

「失敗したら血が出ますからね。あとこれはボディーステッチですよ」

「それだったらピアスと同じじゃん」

マミミはそう言うと言おうとファミレス以来の笑顔を出した。暗い物置でしかも一步前に出



てしまえば喰種の死体が転がっている場所にも関わらず僕たちは楽しく会話をしていました。マミミミとしばらく会話をしていると――

「鈴屋先輩!!」

すると奥から一人の男性が息を切らしながら僕たちの元にやってきました。その男は黒い長髪をし高身長の方で僕が知っている人でした。

「あ、はんべーじゃないですか」

彼の名前は阿原半兵衛<sup>あばらはんべえ</sup>。僕と同じ保安官であり、僕の部下です。

「鈴屋さんがご無事でよかったです。現場で鈴屋さんの姿がなく喰種の遺体だけあったものなので私阿原半兵衛は大変心配しておりました」

「僕は簡単に死にませんよ。あとこの喰種たちは東京以外にやってきた者共です。僕を見て怖がることもなく襲いかかったので、駆逐しました」

ぼくは立ち上がり床に散乱する喰種の死体に指をさし、悲惨な光景を反するかのようにはんべーににこりと笑顔で言葉を返しました。はんべーは怖がる様子を出すことなく、「また県外からの喰種ですか?」と僕の返事を重く受けつとつた。

「それにしてもどうしてはんべーは僕がここにいるとわかってんですか?」

「ちようどやるべきことが終わった時、周辺住民から13区の高架橋付近で何やら喰種の争いが置きているとのご報告を耳にし、もしや鈴屋先輩ではないかと私阿原半兵衛は

すぐに向かいました」

「さすがはんべーですねえ」

はんべーは僕の部下というよりかなりの世話焼きさんです。しばらくはんべーと話していると、はんべーは僕の後ろで座っているマミミにやつと気がつきました。

「あの鈴屋さん？」

「ん？」

「…えっと、そちらの方は？」

「ああ、この子はこの喰種たちに襲われたたんですよ。僕はこの子を家に返すので、はんべーは現場処理をお願いしますね」

「…え？ちよつと、鈴屋先輩？それはどういー」

「さあ、マミミ。目を閉じてくださいね」

「え？あ、うん…」

僕はマミミがちやんと目を閉じたことを確認するとマミミの手を引つ張り、はんべーを残して現場をあとにしました。はんべーとの会話はいいのですが、まずはマミミを早く帰らせることが大切です。

じゅーぞに手を引つ張られ、高架橋下から出た、私。外に出たあと、じゅーぞは私を道路の縁石を座らせ、「ここで待ってください」といい、先ほど『この子を家に返すので』と言ったのにも関わらずじゅーぞは再び高架橋下へと向かった。

(∴ 行っちゃった)

ついさつきまではじゅーぞとくつついていたせいか一人に取り残されても恐怖心が生まれなかった。あんなにおびえていたのになんでだろう？そう考えていると東京保安委員会の保安官の人たちが続々とやってきて、さつきまでいた高架橋下はブルーシートで封鎖された。

(じゅーぞって一体何者だろう?)

じゅーぞは確か東京保安委員会の保安官だと知っているのだけど、あんなに強そうだった喰種の集団をたつた一人でやつつけたのだ。流石にふつーの保安官だなんて言えるわけがない。そう考えているとー

「お待たせしました、マミミ」

「あ、じゅーぞ」

ブルーシートで被された入り口からじゅーぞがヒョイツと顔を出し、私が座る縁石の元に戻ってきた。

「お待たせてしまつて申し訳ないです」

「うん、大丈夫だよ」

私がそう言うとしじゅーぞは「それはよかったです」と私が座る縁石の横に何気なく座った。

「・・・どうだったの、さっきの喰種って」

「ええ、久しぶりに本気を出したほどです。強かったですね」

「久しぶりって、どのぐらい？」

「だいたい去年ぐらいですね」

「去年って・・・それまでは本気で戦ってなかったの？」

「ええ、そうですよ」

ジューゾはそう言うのにこりと笑った。ちなみに言うけどじゅーぞは先ほどまで喰種と戦ったばかりだ。それにも関わらずどうして笑顔を出せるのかわからない。どうしてそこまで笑顔を出せるのか、ふと考えていると――

「それよりも、マミミニ」

すると笑顔を出していたじゅーぞがそう言うのと空気が一変した。

「マミミニはなんで僕の言うことを聞かなかったんですか？」

じゅーぞはまっすぐと私を見ながらそう言った。ずっと同じトーンで私に話していたにも関わらず、今じゅーぞが話している感じはどこか厳しく聞こえる。

「……」

私は口を閉ざしてしまった。私がじゅーぞの従わなかったのは事実だ。でもどう返せばいいのかわからない。

「……ごめんささい」

私はどんな言葉を言えばいいのか考えた末、私はじゅーぞに単純な謝りしか思い浮かばなかった。明確な理由を言うべきなんだけれど、じゅーぞには通用するかわからなかったから、結局そうなつてしまった。あと一人で多くの喰種を倒したじゅーぞなら私に何かするのか少し怖かった理由もあるけれど……

「……マミミが無事だけでもよかったです」

じゅーぞは落ち着いた声でポンつと私の頭に手を置いた。

「……うん」

「喰種に命を奪われなくても、手足を奪われてしまった人がいるんですよ。今回マミミが無傷でいられたのは、たまたま運が良かったかもしれないですね」

通常の私ならば耳に入らない言葉だけど、今の私は本気で死ぬんじゃないかと思ったためか深く感じられる。

「……」

「まあ、流石の今回の”いたずら”は度が過ぎていきますのでやめてください」

じゅーぞの言葉を耳にした私はにやりと口を少し歪ませ、あることを思いついた。

「そうだね… 今度じゅーぞに会ったらいたずらをしますよー」

「え？今度ですか？またマミミに会えるんですかねえ？」

「またどこかで会えるんじゃないかな？」

私はそう言うのとふんつと鼻で笑った。

「とりあえずTSCうちの車をでマミミの家まで送るのでー」

「自分で帰れる」

「…え？」

私はじゅーぞの言葉を遮り、じゅーぞは突然私の口から出た言葉にぼかんと口を開いた。

「本当にマミミ一人で帰るんですか？」

「うん、また喰種に襲われるのは勘弁だからこのまま駅に帰る」

「…」

先ほどファミレスで嘘ついて家に帰らなかったためかじゅーぞは私の言葉に疑うような目でじつと見ていたが…

「… マミミの態度を見る限り、本当に帰るっぽいですね」

「ほいって、まみみは本当に自分の家に帰るよ」

じゅーぞは結局私の言葉を信じたらしい。流石にまた同じパターンに入ろうとは思わない。次こそはじゅーぞの助けがなくて間違ひなく死ぬ。

「まあとりあえずマミミがそう言うならば帰ってくださいね。えっと時間的には…頑張ればすぐ電車に乗れて帰れますね」

「時計ないのでどうしてわかるの？」

「…勘ですよ」

「勘つて、じゅーぞつてやつぱり変だね」

「マミミも同じく変では？」

「それはどうかなあー？」

私はじゅーぞをからかうように小さく笑った。さつきまで喰種に拐われたのに、じゅーぞと楽しく話ができたせいかわかった記憶が思い出さずに笑ってられる。

「さてと…マミミは本当に帰ってくださいいよ？」

「うん、このまま帰るねー。さよーならあ」

私はふらりと立ち上がり、そのままじゅーぞの望み通りに帰っていった。

その時の私はまた会えるとは本気で思っていなかった。

その時の私も、きっとじゅーぞも同じくそう思っていたはず